

「信用，架空資本」論と信用創造論

深 貝 善 太 郎

目 次

- I ま え が き
- II 銀行業信用一般と兌換停止下の銀行業信用と
 - 資本主義的金融機関としての銀行と
 - 資本主義的金融機関としての他の金融機関と—
- III 資本主義的信用の二規定と擬制資本の二形態と
- IV 「信用，架空資本」論と信用創造論と
 - その1 銀行の貸借対照表に
 - 現われた，創造された信用表示—
- V 「信用，架空資本」論と信用創造論と
 - その2 現金のおよび振替的信用創造過程と資本の再生産—

I ま え が き

資本の商品化論，平均利潤を生む資本の利子つき資本への転化論，にはじまる近代的利子および利子つき資本の理論は，最高度に展開された資本物神の理論であるとともに，銀行による信用の取扱関係に具体化され，自己を貫くところの，利子および利子つき資本の理論である。しかし，資本の商品化論段階では，本来の貨幣資本だけが取扱われ，貸付資本のその他の形態は除外されるとともに，貨幣の種類や形態やの区別関係，代用貨幣関係は捨象され，かつ資本の所有者は単に所有者として，簡単化されての考察であった。

即ち，「商品としての資本」の生産関係は，銀行業資本の生産関係，即ち，銀行業信用，または銀行貨幣に，貨幣の，そして資本の，代りをさせる関係に具体化される。それは，産業資本のための，貨幣形態における資本，貨幣資本の供給関係であり，産業資本のための通貨の供給関係である。これに係って，信用創造論と通貨供給論とはある。

しかし、銀行は、「信用と資本とを創造する」(K. III, S. 558.⑩(10)419頁, ⑩698頁, ⑩(4)682頁)といっても、「信用と資本を生産する」資本の生産関係は、銀行業資本の生産関係のもとで、はじめて成立するのではない。単純なまたは資本主義的な、商品流通部面に直接に生ずる「信用と資本とを創造する」資本の生産関係、そこでの、「信用、架空資本」関係が、銀行業資本のもとでのそれに先行する。

そこで、前稿「〈信用と架空資本〉覚え書」(本誌, 前号)に沿って、「信用、架空資本」論と、信用創造論との、または通貨供給論との、関連、前者に含まれての后者の関係、について考察したい。

展開された「信用、架空資本」論を想起し、今日における「信用、架空資本」の生産関係を念頭におき乍ら、問題考察に入ろう。そこでの、信用創造または通貨供給関係が、問題であるからである。そして、資本主義的金融機関としての銀行と他の金融機関との、同一性と差別性との問題に触れ乍ら、問題考察に入ろう。「商品としての資本」の生産関係は、資本主義的金融機関のなかでも、まずは銀行業資本の生産関係に具体化されるからである。そして、『経済学批判要綱』で「信用と資本の信用機構との基本規定」といわれるものと、『経済学批判要綱』の同じ箇所、いま一つの「信用規定」とされるものと(Gr. S.551-2, 邦訳, III, 608-9頁)の同一性と差別性にと触れ乍ら、問題考察に入ろう。信用に関するそこでの規定は、商業信用と銀行業信用とに妥当するところの、従って「信用、架空資本」、従って、信用創造および通貨供給関係考察のために、有用の規定であると考えからである。

Ⅱ 銀行業信用一般と兌換停止下の銀行業信用と

——資本主義的金融機関としての銀行と資本主義的金融機関としての他の金融機関と——

近代的利子および利子つき資本の生産関係は、銀行業資本の生産関係のもとに、具体化する。

しかし、「信用と資本とを創造する」資本の生産関係は、銀行業関係を導入してはじめて現われるのではない。銀行業信用の生産関係に先行し、内含まれて、商業信用に現われた、「信用と資本とを創造する」資本関係がある。

即ち、「信用と資本とを創造する」銀行業資本関係は、利子および利子つき資本の、そして、平均利潤および平均利潤を生む資本の、生産関係に先行するところの、諸関係を含む。そこに、産業家や商人たち相互間の手形関係に表現される「信用と資本とを生産する」資本関係はある。

そして、以上の関係は、中央銀行と預金通貨銀行とへの銀行分化や兌換停止や等に関係ない。

首題の考察のために、何よりも大切なことは、商業信用制度と銀行業信用制度との、発生関係の序次の違いと、前者の転形としての後者の把握とである。首題の考察は、支払手段としての貨幣の機能関係の、そして商業信用と銀行業信用との、発生関係の問題に絶えず立ち帰ることを強制するであろう。そして首題の考察のために大切なことは、中央銀行信用と預金通貨銀行信用との、銀行業信用としての、またはその通貨形態である銀行貨幣としての、同一性と差別性との把握である。そして大切なことは、資本主義的金融機関であるところの、銀行等と他の金融機関との、資本主義的金融機関としての、同一性と差別性の把握である。

さて、中央銀行は、発券銀行であると共に、政府の、そして、銀行の、銀行である。中央銀行は、政府の銀行、銀行の銀行として、貨幣取引業務と貨幣貸付業務とを、併せ営む。このことによって、中央銀行は、信用制度の中核として、また外為会計と共に通貨当局として、預金通貨銀行から区別される。他方、近代的利子および利子つき資本の生産関係は、銀行業資本の生産関係に具現すると共に、信託会社、保険会社、証券会社等、他の金融機関の關係に具現する。

しかし、銀行等は、それが貨幣取引機関であるということ、それが貨幣取引機関であることによって信用の取扱機関であるということ、において他の金融機関から区別される。

中央銀行と預金通貨銀行とへの銀行分化や兌換停止や等は、銀行業関係そのことに、即ち、その商業信用内含関係に、そして貨幣取引業務と貨幣貸付業務の結合としての、従って信用の取扱業務としての、銀行業務の本性に、変化を与えない。

さて、流通過程に現実の流通過程と独特の流通過程とがある様に、貨幣取引にも現実の流通過程でのそれと、独特の流通過程でのそれとがある。しかし、現実の流通過程でのそれが、まずは考察されればよい。そして、時に簡単化の為に、信用および信用貨幣関係を捨象して、貨幣として現われるものは本来の貨幣だけだと前提すること、また貨幣および貨幣種の区別関係なしに、貨幣として現われるものを等しく貨幣として把えることは、許されるであろう。しかし、他ならぬ銀行業信用または銀行貨幣の、創出過程が論ぜられるに当って、貨幣種の一つである銀行通貨と、これに先行する貨幣または貨幣種との区別関係を問わないのは、背理である。

さて、「形態的な組織や集中という点からみれば、……およそ資本主義的生産様式がつくりだす最も人工的な最も完成された産物」(K.Ⅲ, S.620.⑩(10)548頁,⑤(5)782頁,⑥(4)763頁)である銀行制度のもとでは、準備率、準備金を基礎に、信用または銀行貨幣創造関係はえがかれ、支払手段の準備金は支払手段に従属する概念であるという関係は、逆に表現される。

即ち、でき上がった銀行=および信用制度下では、準備率は、経験上、また通貨金融政策上、与えられたものとして現われる。そして、銀行準備率と銀行準備金とを基礎に、銀行の貸付可能の貨幣資本は、現われる。

しかし与えられた、準備率と準備金とにではなく、貨幣取引銀行業務に、そして貨幣取引銀行業務に媒介されての、銀行に流入した貨幣または貨幣資本の銀行準備金と貸付可能の貨幣資本とへの分離に、銀行信用創造の始源を見る。

関係は、今日の兌換停止下でも変わらない。中央銀行と預金通貨銀行とへの銀行分化、資本の再生産と信用の、国民的また国際的発展と国家信用への総括、銀行業者の私的、金支払約束関係の、兌換という制度への展開関係に、つまりは国民的また国際的に展開された資本の再生産と信用関係に、兌換銀行通

貨の不換銀行通貨への転化の可能性と現実性とはある。そして、今日でも貨幣取引銀行業務なしに、銀行業務は、そして銀行業信用創造は、ありえないのである。

支払手段としての貨幣の機能の発生と発展、信用または信用流通による、貨幣の流通よりの追い出し関係の結果として、支払手段の準備金としての退蔵貨幣関係はある。この関係は、銀行業信用のもとでは、反対に現われる。貨幣の支払手段としての機能関係において信用流通はあり、これの展開としての商業信用の銀行業信用への転化関係であるのに、そして、貨幣の支払手段としての機能に結合し、後続しての、支払手段の準備金であるのに、銀行業信用の下では、商業信用は銀行業信用または銀行業信用貨幣を貨幣とする関係において現われ、支払手段の生産関係は支払手段の準備金を基礎に現われる。即ち、信用または信用流通による貨幣の流通よりの追い出し関係の結果である筈の金属準備が、「銀行券の兌換の保証」、「信用制度全体の軸点」、信用制度の「土台」、として現われる（K.Ⅲ, S.S. 587,620, ㊦(10)479頁, 547頁, ㊦(5)738頁, 782頁, ㊦(4)720頁, 762頁）。

金属準備は、国際的に展開された資本関係、国際的に展開された再生産と信用の関係において、外貨準備として形態化される。それは、「国際的支払のための準備金、一口に云えば世界貨幣の準備金」（K.Ⅲ, S. 582, ㊦(10)469頁, ㊦(5)732頁, ㊦(4)714頁）となる。資本の再生産と信用の、国民的、国際的、展開、金属準備の外貨準備への集約関係に媒介されての、兌換銀行通貨の不換銀行通貨への転化の可能性と現実性である。

しかし、銀行業務、銀行業信用、銀行業信用創造、そして遡っては商業信用の、そして支払手段としての貨幣の機能の、発生の始源における関係は、兌換停止下に自己を貫く。

より展開された信用制度として、今日の兌換されない銀行通貨制度はある。金は一つの商品であって、しかし依然として凡俗商品から区別された特殊な商品である。始源における金属貨幣取引の転化せる形態として、金属を含む一国の外貨準備運動はある。そこには、資本主義の世界史的展開と、資本の態様に

おける変化と、がある。兌換されない、より国内的または国際的に展開された「信用と資本とを創造する」銀行業資本の生産関係の基礎に、より展開された現実資本の生産関係を、そしてそこに自生する、支払手段の生産関係を、見る。

単純な、または資本主義的な、商品または貨幣関係がそこにある以上、支払手段の生産関係は自生する。

商業信用と銀行業信用とは、発生の序次を異にし、前者は後者の基礎をなす。それと共に、両信用形態は同時並存の関係にある。そして、貨幣取引銀行関係に、即ち、預託された貨幣または貨幣資本の、他ならぬ貨幣取引銀行関係に媒介されての、銀行準備金と貸付可能資本とへの分離に、銀行業信用創造の始源を見る。そして、銀行業信用は商業信用のこれへの転形関係において把握される。

でき上がった銀行および信用制度下では、準備率は、経験上、また通貨金融政策上、与えられている。そして、銀行準備率と銀行準備金を基礎に、銀行業信用創造は現われる。しかし、実際に今日の兌換の停止された信用制度下において、貨幣取引銀行業務なしに銀行業信用創造は成立しない。

貨幣取引面での銀行業務があって、貸付または信用の取扱の銀行業務、銀行業信用または銀行貨幣創造はある。この基本関係は、その儘の形とこれの転倒された形、銀行準備金を基礎に銀行業信用創造はなされるという転倒された形とにおいて現われる。恰も、紙幣流通が、貨幣流通の法則その儘の表現と、これの転倒された紙幣流通独自の法則との、二つの形において現われるように。しかし、基礎的關係は、前の表現形態にある。そして、銀行業信用が、基礎的關係その儘の形態と、これの転倒された表現形態との二つの表現において現われること、兌換制下におけると、兌換停止下におけると変りはない。

そこにあるものは、兌換停止という事実である。そこにあるものは、資本の再生産と信用の国家信用への総括関係に内在する、再生産内的信用への再生産外的信用の結合、信用流通または貨幣流通法則への、紙幣流通特殊法則の結合と、これによる価格の度量標準の変更関係混入と、である。

対内準備の、または対外準備の、形態における変化を、レザーブマネーの、ベースマネー、ハイパワードマネーへの変化を、貨幣流通法則の態様における変化を、兌換停止は顕わにする。

しかし、資本主義的生産関係に自生する手形関係なしに、これの展開関係はない。そして、兌換制下においても、兌換停止下においても、実際に、貨幣取引の資本関係、または、これに表現される現実資本の諸関係なしに、銀行業信用創造、即ち、預金された現金の、銀行準備と貸付可能の貨幣資本との分離、銀行が自由に処分できる貸付可能資本の形成はない。

銀行制度は、本来的に一部準備制度である。それが一部準備制度であるのは、貨幣取引銀行業務による。そして、銀行準備率なるものは、貨幣取引銀行業務経験上、そして通貨金融政策上、いわば省略法的に与えられている。そこに省略された、時間的、歴史的発生関係に照らしての、準備の概念上の再建が問題である。準備が信用流通を規定するのではなく、信用流通が準備を規定する。

そして、貸出枠の多寡を規定するものは、「商品としての資本」への需要、または需要動向であり、これが、貸付可能の貨幣資本の運動を規定する。

こうして、国家信用結合関係に媒介された再生産外的信用を捨象すれば、そこに形成される銀行業信用または銀行貨幣量を規定するものは、産業家や商人たち相互間の信用量を規定するものにおけると同じく、「事業そのものの要求¹⁾だけ」である。そして、支払手段としての貨幣の機能の、始源における関係、即ち、そこに形成される信用量は、「売られる商品の価格規定」(K. I, S. 150, ⑩(1)388頁, ⑨(1)178頁, ⑧(1)176頁)に依存するという関係は、夙に信用流通²⁾の法則の、貨幣流通法則との同一関係を、示唆する。

1) 「銀行券の流通は、イングランド銀行の意志にはかかわりないように、これらの銀行券の兌換可能性を保証する地下室内の金属準備にもかかわりない。」(K. III, S. 541, ⑩(10)382頁, ⑨(5)673頁, ⑧(4)659頁)「流通貨幣—銀行券と金—の量に影響するものは、ただ取引そのものの要求だけである。」(K. III, S. 541, ⑩(10)382頁, ⑨(5)674頁, ⑧(4)659頁)

- 2) 「すでに単純な貨幣流通を考察したところ（第一部第三章第二節）で論証したように、現実に流通する貨幣の量は、流通の速度と諸支払の節約とを与えられたものとして前提すれば、諸商品の価格と取引の量とによって規定されている。同じ法則は銀行券流通の場合にも支配する。」（K.Ⅲ, S. 538, ㊤(10)375頁, ㊤(5)568頁, ㊤(4)654頁）

さて、かくして近代的利子および利子つき資本の生産関係は、本来的蓄蔵貨幣の貸付資本への転化の関係ではなく、銀行関係に具体化する。銀行に流れ込む貸付可能の貨幣資本の第一のものは、「生産者や商人が準備金として保有する貨幣資本」（K.Ⅲ, S. 416, ㊤(10)132頁, ㊤(4)506頁, ㊤(3)502頁）即ち、「資本主義的生産過程から、また前資本主義的生産様式のもとでも商業一般から生ずる」蓄蔵貨幣の、第一形態と第二形態と（K.Ⅲ, S. 331, ㊤(9)350-1頁, ㊤(4)397-8頁, ㊤(3)394-5頁）であった。そして、これと共に銀行に流れ込む貨幣資本家たちの預金も、諸階級の貯蓄も、つまりは、「その機能が金自身によって行なわれるか代理者によって行なわれるかにかかわりなく、その機能が金を唯一の価値姿態または交換価値の定在として、単なる使用価値としての他のすべての商品に対立させて固定する場合」（K.Ⅰ, S. 144, ㊤(1)373頁, ㊤(1)170頁, ㊤(1)168頁）における金の一機能において、把えられうるであろう。しかし、銀行関係なしに本来的に貸付可能の資本は貨幣資本家たちのそれだけであった。

さて、資本の生産関係なしに銀行業資本の生産関係はないが、銀行業資本の生産関係なしに、銀行業信用、または銀行貨幣を、貨幣、資本、とする一切の生産関係はない。しかして、銀行関係なしに、銀行貨幣を貨幣または単なる貨幣以上の貨幣として受け入れ、これを「商品としての資本」市場に繋ぐ他の金融機関の関係は、ないのである。

しかし、銀行業資本に後続する資本の生産関係は、銀行業資本の生産関係なしに理解できないが、銀行業資本の生産関係の方は、これに後続する、資本の、そして他の金融機関の、生産関係なしにも理解できる。

しかして、近代的利子および利子つき資本の生産関係を表現するところの、

範疇としての資本主義的金融機関の序列において、銀行等が、他の金融機関に先行する。そして、以上の関係は、貨幣および貨幣種に即して言えば、貨幣として現われるものを無差別に貨幣として把えるのではなく、貨幣の種別がそこに見られなければならないことを、物語る。

Ⅲ 資本主義的信用の二規定と擬制資本の二形態と

近代的利子および利子つき資本の生産関係は、銀行業資本の生産関係に具体化する。しかし、銀行業信用に現われた「信用と資本とを創造する」資本の生産関係に、先行し、内含して、商業信用に現われたそれがある。他方、範疇としての資本主義的金融機関の序列において、銀行等が他の金融機関に先行する。

それ故に、資本主義的信用制度は、まずは他の金融機関関係捨象のもとに、発生関係の序次の違い、しかし基礎にあるものと基礎にあるものとの関係にある、二つの信用制度、商業信用制度と銀行業信用制度とにおいて、把えられる。

銀行関係を導入しなくても、支払手段の生産関係は、現実の流通過程に直接に発生する。そして、現実の流通過程に直接に発生する信用、商業信用が、「信用の本来の基礎をなしているように、その流通用具、手形は本来の信用貨幣すなわち銀行券などの基礎をなしている。」(K.Ⅲ, S.413, ㊦(10)126-7頁, ㊦(4)502-3頁, ㊦(3)498頁)

手形は、貨幣の支払手段としての機能的存在形態である。そして、その支払手段としての機能関係というのは、債権債務の相殺ということの別の表現である。そして、それが支払手段として流通し、「最後に債権債務の相殺によって決済されるかぎりでは、絶対的に貨幣として機能する。なぜならば、その場合には貨幣への最終的転化は生じないからである。」(K.Ⅲ, S.413, ㊦(10)126-7頁, ㊦(4)502頁, ㊦(3)498頁)

しかし、支払差額は、決済されなければならない。債権債務の連鎖の途切れ

た所で、それは貨幣種であることを止める。そして、本来の貨幣であるか、銀行貨幣であるか、現実の支払手段の、出動を待たなければならない。

銀行関係は、産業または商業個別資本連関の枠を越えての、債権債務の相殺を可能にする。債権債務の相殺範囲が、貨幣取引機関である銀行の債務において、より大である。商業信用におけるよりも、銀行業信用において、債権債務の相殺の範囲がより広く、流動性が高い。従って、信用形態の、商業信用から銀行業信用への転化が、生ずる。しかして、手形割引その他の方法により銀行から貸付をうけるということは、「自分の商品を貨幣に転化させるまえに、貨幣を商品に転化させ」る手形関係（K. I, S. 150, ㊸(1)389頁, ㊹(1)178頁, ㊺(1)177頁）自身の、発展形態である。そして、銀行関係において、諸支払の、または手形決済の、資本還流、産業または商業個別資本還流への、依存性はなくなる。

しかし、かくして商業信用は銀行業信用に転形する。そして、手形割引その他の方法で、銀行貸付はなされる。

しかし、商業信用はなくなる。商品または貨幣の生産関係がそこにある以上、または、資本の生産関係がそこにある以上、商業信用はつねに新たに発生する。

かくして資本主義的信用制度は、発生の序次の違う、そして基礎にあるものと基礎にあるものとの関係にある二つの信用制度、商業信用制度と銀行業信用制度との、総合として存するのである。

さて、資本主義的信用制度は、資本主義的な、支払手段の制度である。それは、「一方では信用操作に、他方では信用貨幣に、大きな度合で貨幣の（従って資本の、……引用者）代りをさせる」（K. III, S. 532 ㊸(10)362-3頁, ㊹(5)661頁, ㊺(4)646頁）制度である。

しかし、支払手段の生産関係は、本来、追加的価値または追加的資本関係を含む。この関係は臆て、資本主義的利子つき資本の生産関係が、「資本主義的信用制度の基礎」（K. III, S. 621, ㊸(10)550頁, ㊹(5)784頁, ㊺(4)764頁）をなす関係において、現われる。

貨幣の支払手段としての機能は、その発生関係、価格の実現の後日に延期された商品譲渡関係において、既に、手形債務者への追加的価値または追加的資本関係を内含する。そして、手形は一つの貨幣種である。それは、所有者にとっての貨幣形態での——架空だとはいえ——資本を形成する。

既創造の信用の、支払手段としての機能関係、債権債務の相殺関係において、当事者に追加資本関係はない。そこでは、債権債務関係は、相殺関係にあるからである。しかし、手形の発生関係において、価値または資本関係は、商品と将来の貨幣または貨幣種との対立関係として、現われる。そして、その発生関係での、将来の貨幣または貨幣種としての、追加の——架空だとはいえ——資本形成関係は、その消滅まで変らない。

その発生関係に内在する、貨幣種としての、そして追加的資本としての、関係は、銀行業信用にあって、より顕わである。後に見るように、預金通貨銀行について云えば、そこに形成される預金は、それが支払手段として再生産過程に直接に機能しない場合でも、預金者のために、一つの貨幣種を形成する。そして、それは、預金者にとっての貨幣または貨幣資本の存在形態を形成すると共に、それが銀行業信用であり銀行準備金を超える名目預金に転形する限りでは、銀行業者のために追加的擬制資本を形成する。

かくして、資本主義的信用制度は、支払手段の制度として規定されると共に、資本主義的利子つき資本の制度として規定される。この区別関係は、『経済学批判要綱』で与えられる二つの信用規定（Gr. SS. 551-2, 邦訳, 608-9 頁）に、繋がる。即ち、「信用と資本の信用機構との基本規定」といわれるもの、即ち「資本の必然的傾向」、「流通時間をもたない流通」、貨幣が「それが資本となることなしに、すなわち価値となることなしに形態転化を媒介する」関係、と、いま一つの信用規定、即ち、「資本が自己を個別資本から区別して、すなわち資本としての個別資本が〔自己を〕その量的制限から区別して措定しようとする形態」、との、区別関係に繋がる。区別される信用規定の、後の規定は、前の規定の中に含まれ、前の規定の外化せるものとして把えられうる。事実、さもなければ貨幣形態で流通過程に追加されなければならない、ま

たは、さもなければ貨幣形態で流過程に分割されなければならない、資本の代りを、手形にさせる関係は、即ち、還流を待つことなく手形関係によって次の生産過程、生産時間につながれるという「資本の必然的傾向」、**「流通時間をもたない流通」**は、それ自体、**「資本としての個別資本が〔自己を〕その量的制限から区別して措定しようとする形態」**、ではある。

区別さるべき信用の規定関係が、商業信用にも銀行業信用にも妥当すること、いうまでもない。しかし、この区別関係は、臆て、利子つき資本の実存形態としての擬制資本の区別関係、即ち、利子を生む資本として投下さるべく予定された擬制資本と、この資本にとっての投下対象としての擬制資本との区別関係に、関連する。

即ち、区別さるべき信用規定の、後の規定の「方向 (line) でもたらず最高の結果は、一方では**擬制資本 (fictitious capital)**である。他方では信用は、たんに**集積 (Konzentration)**の新たな要素、すなわち諸資本を個々の集中しつつある (**zentralisierend**) 諸資本において絶滅することの新たな要素としてだけ現われる。」(Gr. S. 552, 邦訳, III, 608-9頁)

さて、将来の貨幣、手形は、その満期支払日まで支払手段として流通し、最後に債権債務の相殺によって決済される限りでは、絶対的に貨幣として、従って絶対的に資本として、機能する。しかし、手形は、価値または資本の存在形態ではあっても、その発生関係において、「**将来の貨幣 (künftiges Geld)**」であって、現在の貨幣ではない。

銀行貨幣においても、同様である。しかし、銀行貨幣は、商業手形に対し、現在の貨幣として現われる。銀行関係は、産業または商業個別資本連関の枠を越えての、債権債務の相殺を可能にするからである。従って、追加的価値または追加的資本関係といっても、商業信用と銀行業信用との間に、利子つき資本規定における区別が生まれる。

支払手段という用語それ自身の中に、即ち、発端における、「**価格の実現を後日に延期された商品譲渡**」としての信用規定の中に、または、この信用規定自身の転倒された表現形態、商品の、流通からの離脱の過程の媒介者、流通用

具、としての手形の、発生関係そのものの中に、追加的資本関係は含まれている。

しかし、未実現の価格、観念的貨幣量と、これの実現形態、貨幣との間に利子はある。

商品は、その価格規定において貨幣であるが、未実現の価格、観念的貨幣量は、「商品としての資本」とはなりえない。そして、将来の貨幣としての商業手形と、現在の貨幣としての銀行業手形との間に、利子はある。

従って、問題は、商業信用に利子は本来のか否かにではなく、そこに商品または貨幣として現われるものが、利子つき資本規定における、または利子つき資本規定の結合せる、資本であるか否か、にある。

「本来の貨幣信用の混和関係」(K.Ⅲ, S. 501, ㊦(10)298頁, ㊦(5)619頁, ㊦(4)606頁)が、利子関係を導く。即ち、商品としての資本は、貨幣その他の形態で現われる。「すべての貸付けられる資本は、その形態がどうであろうと、またその使用価値の性質によって返済がどのように変形されようとも、つねにただ貨幣の特殊な一形態でしかない。」(K.Ⅲ, S. 356, ㊦(10)14頁, ㊦(4)429頁, ㊦(3)427頁)

そして、資本運動一般におけると同様、利子および利子つき資本の生産関係に、時間関係は不可欠の要素である。というよりも、資本の運動一般におけると異って、利子および利子つき資本の生産関係では、全てが時間関係として現われる。他方、流通時間をもたない流通への展開として、信用と資本の信用機構とは基本規定された。「物の価格の決定では時間は問題にならない。利子の決定では時間がおもに計算にはいる。」(アダム・ミュラー『政治学要論』、ベルリン) 1809年、「第三巻」、138頁, K.Ⅲ, S. 369, ㊦(10)41頁, ㊦(4)446頁, ㊦(3)444頁)しかし、利子および利子つき資本の生産関係を、単なる時間問題に、または単なる流通時間の問題に、解消させてはいけない。

さて、「商品としての資本」は、その、全てが本来の貨幣の形態で存在するとしても、その、所有としての資本の運動関係において、必然的に、価値請求権、擬制資本に、転形する。預金通貨銀行についていえば、各方面への貸

出金勘定、並びに、短期、長期の、各種保有有価証券が、これである。銀行が自由に処分できる貸付可能な資本の量と、これに対する需要または需要動向が、各方面への貸出または、短期、長期の、擬制資本運用の比率を規定する。

利子つき資本の生産関係と、譲渡可能の価値請求権関係とが、貸付可能資本の運用形態としての擬制資本を媒介する。資本主義的生産様式の発展と歩調を合わせて、この種擬制資本の形態とこれの市場とは発展する。貸付可能の貨幣資本の蓄積と擬制資本市場の発達とは、金融の有価証券化を媒介する。資本主義の成熟とともに、金融機関ばかりでなく、産業資本の、この市場での遊休貨幣資本運用も進展する。貸付可能貨幣資本の蓄積、擬制資本形態、これの取引機構の発展は、銀行と証券との結合を媒介する。

そして、既に触れたように、資本主義的信用制度の内的編成関係において、商業信用制度が銀行業信用制度に先行する。他方、範疇としての資本主義的金融機関の序列において、銀行等いわゆる貨幣的金融仲介機関が、他の金融機関に先行する。資本主義的金融方式の序列において、間接金融方式が直接金融方式に先行する。クレジットパラダイムといわれるものがマネーパラダイムといわれるものに先行する。そして、範疇としての擬制資本の序列において、売られた商品に対する債務証書、手形が、従って、支払手段として再生産過程に直接的に役割を演ずる擬制資本、流通用具としての擬制資本が、そして、貸付可能な資本、利子を生むように予定されている資本、としての擬制資本が、これの利子つき資本運動の結果としての、または利子つき資本の投下部面としての、擬制資本に先行する。

後の形態の擬制資本の論述に当り、貸付可能資本として現われるものは全て本来の貨幣形態で存するものと前提することは、許されるであろう。しかし、経済学の叙述が、資本主義的生産様式の内的編成に規定された経済的範疇の序列に添うものである以上、擬制資本範疇の叙述も、これに従わなければなるまい。¹⁾

1) 旧稿「利子生み資本の実存形態としての擬制資本」『バンキング』第79号、75頁以下、参照。

さて、信用創造論または通貨供給論との繋がりにおいて問題となるのは、流通用具、流通貨幣資本、そして貸付可能の貨幣資本としての、擬制資本である。

Ⅳ 「信用、架空資本」論と信用創造論と

——その1 銀行の貸借対照表に現われた、創造された信用表示——

信用創造という用語は、通例、銀行業信用創造を表現するものとして、用いられる。しかし、再生産にとってより直接的な、「信用と資本とを創造する」資本関係は、商業信用におけるそれである。銀行業信用面に現われたそれは、いわば狭義の信用創造であって、信用創造という用語は、広義には、商業信用関係におけるそれをも含めて用いられるべきである、と云わなければならない。¹⁾そして、後に見るように、信用創造という用語は、最広義には、信託会社等、銀行以外の金融機関の関係をも含めて用いられて然るべきである。信用創造という用語が通例、狭義に銀行業信用創造にのみ用いられるのは、蓋し、資本の生産関係は、利子および利子つき資本の生産関係に集約され、外面化されるように、「信用と資本とを創造する」資本の生産関係は、まずは、銀行業信用におけるそれに集約され、外面化されるが故に、であろう。

1) 麓 健一『信用創造理論の研究』東洋経済新報社、昭和28年4月刊、143～4頁、桜井 毅、山口重克、佐美光彦、伊藤 誠編『経済学Ⅰ』有斐閣、昭和55年4月刊375～8頁参照。

さて、銀行業信用創造は、必ずしも銀行貨幣創造ではない。銀行貨幣は、支払手段として再生産過程で直接的役割を演ずる擬制資本である。そして、創造された信用一般におけると同じく、銀行貨幣は、これに対する準備金を越える限りで、銀行業者のために追加利潤を齎す擬制資本である。次の例は、この関係に就いての、兌換制下発券銀行に例をとっての、金属準備と銀行券との対応関係を抽出としての叙述である。

「イングランド銀行がその地下室の金属準備によって保証されていない銀行券を発行するかぎりでは、同銀行は価値表章を創造するのであって、この価値表章は、ただに流通手段を形成するばかりでなく、この無保証銀行券の名目額まで同銀行にとっての追加の——架空だとはいえ——資本を形成するのである。そしてこの追加資本は同銀行に追加利潤をもたらす。」(K.Ⅲ, S.557, ㊸(10)416頁, ㊹(5)697頁, ㊺(4)680-1頁)

同じ関係は、預金通貨銀行にあっての、現金、預け金と、預金通貨と規定されうる預金との対応関係を抽出しての関係に、妥当するであろう。

しかし、上の例は、銀行貨幣が支払手段として再生産過程に直接的に役割を演ずる擬制資本であるということ、そしてそれが自身のための準備金を越える限りでは、ただに流通手段として擬制資本を形成するばかりでなく、銀行業者に追加利潤を齎す擬制資本を形成するということを明示する、簡単な叙述である。しかし、中央銀行通貨は、銀行券だけではない。兌換制下中央銀行において、金属準備は銀行券にのみ対応するのではない。他方、預金通貨銀行において、現金、預け金は、預金通貨と規定されうる預金との対応関係においてのみ存するのではない。

銀行業資本の運動は、そして銀行業信用関係は、銀行の貸借対照表に表現される。そして、兌換制下であるか、兌換停止であるか、何れにしても中央銀行の金属準備形成関係は、貨幣取引関係自身の転化形態ではある。

銀行業信用創造関係は、中央銀行では、借方、金地金、現金（補助貨）との量的対比において、これを越える、貸方、銀行券、金融機関および政府の預金、の関係において示される。預金通貨銀行では、借方、現金、預け金との量的対比において、これを越える、貸方、各種預金総量の関係において、即ち、全預金総量のうち、現金、預け金に見合う実質預金部分と、これを越える名目預金部分との関係において、示される。そして、創造された中央銀行信用と預金通貨銀行信用との総体は、中央銀行と全預金通貨銀行との統合貸借対照表、借方、金地金、現金（補助貨）を越える、貸方、銀行券、預金総量、の関係において表現される。

銀行業資本運動は、貨幣取引に始まる。貨幣取引、預金取引により、銀行に流入した現金の、他ならぬ貨幣取引、預金取引に媒介されての、銀行準備金と銀行が自由に処分できる貸付可能な貨幣資本とへの分離である。そして、「商品としての資本」に対する需要が、この運動を規定する。

資本主義的形態における蓄蔵貨幣の第一形態、即ち「資本のうちつねに貨幣形態で存在しなければならない支払、購買手段の準備金」、および、「未投下の蓄積貨幣資本」等「蓄蔵貨幣の第二の形態」(K.Ⅲ, S.331, ㊤(9)350-1頁, ㊤(4)397-8頁, ㊤(3)394-5頁)の、流通貨幣への分解と再形成とに関する単に技術的な諸操作を、銀行は産業家や商人たちに代わり営む。そこでは、「商業世界の準備金は、共同の準備金として集中されるので、必要な最小限に制限され」(K.Ⅲ, S.416, ㊤(10)132頁, ㊤(4)506頁, 岩(3)502頁)、圧縮されて、預金された蓄蔵貨幣総量は、銀行のもとに準備金として蓄蔵必要の貨幣資本と、銀行が自由に処分できる貸付可能な貨幣資本とに、分離する。銀行が自由に処分できる貸付可能な資本は、さらには、「貨幣資本家たちの預金」によって、そして「諸階級の貨幣貯蓄や一時的な遊休貨幣」、「収入の未消費部分」、の預金(K.Ⅲ, S.416, ㊤(10)132-3頁, ㊤(4)506頁, ㊤(3)502-3頁)等によって形成される。

展開された信用制度のもとでは、蓄蔵貨幣の第一形態と第二形態とは、または、その多くの部分は、利子を生むように予定されている資本にとっての投下部面である擬制資本の市場に、直接いくことになるかも知れない。他方、いまは捨象されねばならない、銀行のこの市場への参加も進むであろう。

貨幣取引の、また貨幣取引手段の、発展と共に、産業家や商人たちの、蓄蔵貨幣の第一形態と第二形態、および、貨幣所得の、貯蓄部分または未消費部分だけでなく、寧ろ、現在流通必要の、または現在流通中の、資本および収入の貨幣形態の管理が、貨幣取引機関、銀行に委ねられる。

かくして、蓄蔵貨幣関係でのそれと、非蓄蔵貨幣関係でのそれとにおいて、貨幣取引銀行業務はある。そして、後の関係において、銀行は現実の流通過程の只中にある。

そして、取扱対象となる貨幣または貨幣資本の性質によって、預金区分は生

まれる。

かくして、預金通貨銀行とされる銀行の預金は、振替可能の要求払預金ばかりではない。そして、要求払預金であっても、支払手段として再生産過程で直接的に役割を演ずる預金、預金通貨と規定されうる預金、ばかりではない。

さて、銀行の手許現金と、中央銀行への預け金は、預金流入に係っての、営業用手許現金であり、銀行間貸借関係決済のための通貨であると共に、総体として、全預金に対する準備金としての機能関係にある。そして、銀行バランスシート借方、貸出金、保有有価証券等現在高は、そして、貸方、預金総額の中、借方、現金、預け金との量的対比において、これを越える名目預金額は、当該銀行に係わる創造された信用の、現在残高を示す。

全預金通貨銀行統合勘定では、預金通貨銀行相互間の、預金その他、債権債務関係は相殺される。そこでは全預金通貨銀行に係わる創造された信用の、現在高が示される。

そして、日銀、外為会計の、通貨当局、と全預金通貨銀行との統合勘定では、通貨当局と全預金通貨銀行との間の勘定は相殺されて、通貨当局を含めた全銀行組織に係わる創造された信用の、現在高が示される。かくして、いわゆるマネタリーサーベイは、即ち、借方、金地金および対外資産、政府、地方公共団体、並びに民間向けの、貸出金、および国・公・社債、株式の、擬制資本投資と、貸方、銀行券、要求払預金、および定期性預金との、対応関係は、得られる。

しかし、マネーサプライ統計およびマネタリーサーベイでは、支払手段として再生産過程で直接的に役割を演ずる預金のみを預金通貨と呼ぶ立場はとらない。¹⁾

銀行貨幣というのは、支払手段として、「再生産過程で直接的役割を演ずる」(K.Ⅲ, S.495, ⑩(10)288頁, ⑤(5)612頁, ④(4)600頁)銀行業信用のことである。預金通貨というのは、かかる機能関係にある銀行預金のことである。そして、当座預金は、その機能関係において、預金通貨である。普通預金も、今日では口座振替ということによって支払手段として再生産過程で直接的役

割を演ずる。しかし、ひとがこれを預金通貨と規定するに至るか否かは、蓋し、預金通貨としての役割が普通預金において支配的であるか否かに依存する。

マネーサプライ統計およびマネタリーサーベイでは、支払手段として再生産過程で直接的に役割を演ずるか否かではなく、支払手段への転化の容易度の視点から、要求払預金を預金通貨と呼び、定期性預金を準通貨と呼び、さらには譲渡性預金、郵貯、信託等を加えての、複数の指標が示される。²⁾

- 1) 岡橋 保『貨幣論新版』春秋社、昭和34年12月刊、133頁参照。
- 2) 大野芳雄、山口 泰、共編『図説 日本銀行』財政詳報社、昭和59年4月刊、146-7頁、248-9頁。岡橋 保『現代信用理論批判』九州大学出版会、1985年5月刊、358頁以下、参照。

しかし、かくして、銀行の貸借対照表に現われた、創造された信用現在高の表現関係が、マネーサプライ統計に関連を有してのマネタリーサーベイとなる。

さて、支払手段として再生産過程で直接に役割を演ずる信用として、銀行業信用に先行して商業信用がある。しかして、先行する商業信用関係からの、転形関係において、銀行業信用は把えられる。

商業信用におけるよりも、銀行業信用において、信用連鎖は悠に優れている。それ故に、銀行関係のもとでは、商業信用は銀行貨幣を貨幣とする関係において現われる。資本の生産関係が、利子および利子つき資本の生産関係に集約され、外面化されるように、「信用と資本とを創造する」資本の生産関係は、銀行業信用におけるそれに集約され、外面化される。

銀行業信用は、返済ということによってのみ、消滅する。

上に見たように、そして後に再びこの問題に戻るように、創造された銀行業信用現在残高は、銀行の貸借対照表、借方、貸出金、保有有価証券等に示されるとともに、借方、銀行準備金を越える、貸方、銀行券と全預金量の関係において、示される。

そして、銀行の貸借対照表に現われた、創造された銀行業信用の残高の、かかる表示関係は、つまりは、貨幣取引に発しての、銀行業資本運動の帰結である。

V 「信用、架空資本」論と信用創造論と

——その2 現金および振替の信用創造過程と資本の再生産——

さて、創造された銀行業信用の残高、即ち、銀行の貸借対照表に現われた、借方、貸出金、保有有価証券等と、貸方、預金総額の中、銀行準備金を超える名目預金との対照関係は、つまりは各種預金による流入貨幣の、現金または預金設定の形での、貸付に発しての帰結である。

しかし、貸借対照表に現われた、創造された信用表示は、預金による流入貨幣の、貸付関係そのことの直接的表現ではない。

帳簿振替によって、支払手段として再生産過程で直接的役割を演ずる預金関係の基礎に、即ち、振替の銀行信用創造の基礎に、現金的銀行信用創造がある。即ち、無現金支払取引の基礎に、現金支払取引がある。そして、銀行の信用創造機能の基礎に、銀行の信用媒介機能または信用代位機能といわれる関係があることに、注意されなければならない。

貨幣取引ということ、即ち、それにより流入した現金の、他ならぬ貨幣取引に媒介されての、銀行準備金と貸付可能の貨幣資本とへの転化、実質預金と名目預金とへの預金の分離、ということが、銀行業信用創造の出発点¹⁾である。しかして、銀行貸借対照表に現われた、創造された信用表示を、預金による流入貨幣の、貸付の直接的表現として把えてはいけない。また、銀行の信用創造機能を、準備を基礎とする信用の貸付関係において直接的に把えてはいけない。

1) 高木暢哉『銀行信用論』春秋社、昭和24年2月刊、10頁以下、参照。

銀行は、中央銀行信用を受ければ、これを基礎に、いくらでも信用創造可能に見える。しかし、実際に、今日の発達した信用制度下において、貨幣取引銀行業務なしに、銀行業信用は成立しない。

貨幣取引は本来的に一部準備制度である。貨幣取引に始まって、貸手と借手との間の信用取引の媒介者としての、または代位者としての、銀行機能、即ち銀行の信用媒介機能または信用代位機能といわれるものはある。貨幣取引は、

本来的に一部準備制度である。

そして、これが展開されての、銀行の信用創造機能といわれる関係である。

口座振替または小切手に現象する、預金通貨関係を捨象し、現金での預金流入入をのみ、想定しよう。そして、，貨幣取引においてと同様、貸付可能資本に対する需要面においても、いまは独特の流通過程での（または、からの）それは措いて、現実の流通過程での（または、からの）それが考察されればよい。

さて、銀行が貨幣取引機関である以上、現金の出納預金をのみ想定してもなお、貨幣貸付は、銀行帳簿上の貸方記入によってなされると想定することは、許されるであろう。しかし、再生産過程での、または顧客間の、銀行帳簿振替は、いまは捨象されている。預金は必要に応じて、引き出される。

独特の流通過程を出れば、「商品としての資本」は「商品としての資本」であることを止める。それは、生産諸要素に、または生活手段に転形する。資本として前貸され、または将来の所得として支出される。しかして、返済は、借手のもとの、資本還流に、または将来の所得形成に、依存する。

現実の流通過程では、一方の売は他方の買である。それは、「諸商品の形態変換または変態」(K. I, S. 119, ㊦(1)321頁, ㊧(1)138頁, ㊨(1)136頁)に現象しての、「社会的労働の物質代謝」(K. I, S. 120, ㊦(1)324頁, ㊧(1)140頁, ㊨(1)138頁)の過程である。

貸出された貨幣は、再生産、生産および消費の過程の、流動性の表現としての、流通貨幣資本としての、また所得の貨幣形態としてのその機能関係において、銀行組織外への漏出部分と、貨幣取引機関である銀行に各種預金となって流入する部分と、借手によって返済される部分とに、分離する。

そして、顧客の貨幣または貨幣資本の性質により、要求払預金、定期性預金の、各種預金は形成される。返済または預金により銀行に還流した現金は、他の預金と併せ、銀行準備金を残して、再び貸出可能の貨幣資本となる。

即ち、預金により還流した現金は、他ならぬ貨幣取引銀行業務に媒介されて、銀行準備金と貸付可能資本とに、再び分離するであろう。貸付可能資本に

対する需要または需要動向が、これの運用様式を規定する。以下、同じ関係が繰り返されるであろう。¹⁾

預金が貸付けられ、投資され、再び預金される全過程は、「ある所与の貨幣量のたらい回し」²⁾のように見える。しかし、現実貨幣は盥まわしとしても、かくして、貨幣請求権、預金は累積され、かくして、資本の再生産の、即ち生産および消費の過程の流動性と、銀行業資本または銀行組織といわれるもの——しかし、簡単化のため、複数銀行ではなく、一国一銀行を想定してもよい——とを前提すれば、現金の出納預金関係をのみ想定しても、「銀行制度を通じて生ずる銀行預金の倍数的拡張」³⁾はえられるであろう。

- 1) 2) 依光良馨『貨幣信用論研究』第3版1976年4月刊, 159頁, 岡橋 保『現代信用理論批判』369—370頁参照。
- 3) サムエルソン『経済学』第14—6表「銀行制度を通じて生ずる銀行預金の倍数的拡張」(原書, 12版279頁, 邦訳, 11版<第16—4(h)表>上324頁)参照。簡単化のため一国一銀行を想定した場合, 同表の, 左のところ「銀行の段階的位置, 最初の銀行, 第二段階の銀行, ……全体としての銀行制度についての合計」のところの, 「銀行」および「銀行制度」を「銀行取引」とすればよい。

そして、現金の銀行信用創造関係を基礎とし、これをその儘の、振替的銀行信用創造関係である。

現金の銀行信用創造では、再生産過程の流動性に媒介されて、貸出された貨幣が、銀行組織外への漏出部分を除いて、預金または返済により銀行に還る。

振替的銀行信用創造では、同じく再生産過程の流動性に媒介されて、貸出によって設定された預金が、銀行組織外への漏出部分を除いて、銀行に返済または他の顧客の預金に振替えられる。

現金の信用創造と振替的信用創造とを区別するものは、貸付形態に、即ち、貨幣貸付が現金でなされるか、帳簿上の預金設定の形でなされるかに、現われる。しかし、帳簿振替ということによって、預金が支払手段として再生産過程で直接的役割を演ずるか否かに、差異はある。貨幣貸付の形態にではなく、貨幣取引の形態に、両形態の銀行信用創造の差異はある、といわなければならない。

預金設定の形での貨幣貸付は、それ自体無現金支払の取引である。そこでの貸出金勘定借方記入と、預金勘定貸方記入とは、利子つき資本の運動過程に現われた、銀行振替取引、無現金銀行支払取引である。しかし、貨幣取引業務にも、独特の流通過程でのそれと現実の流通過程でのそれとがあるとしても、当該銀行業資本のもとに創出される独特の種類の商品としての利子つき資本の運動過程に現われた銀行振込と、他人のための貨幣取引銀行振込業務とは、区別されなければならない。

預金設定の形での貨幣貸付は、直接的な名目預金設定として、即ち、先行する実質預金とは別個の、新たなる名目預金の設定として、把えられてはならない。それは、先行する実質預金の一部の名目預金への転化と、新たなる実質預金の設定の関係として、把えられなければならない。¹⁾

1) 高木暢哉，前掲書，18頁，参照。

貸出および割引の「代り金」振込における、二つの現金取引に「擬制」しての「銀行簿記において採用されているいわゆる〈現金的仕訳法〉」，「銀行が現金でもって貸出を行ない，ついでその現金が預金として預け入れられるものとして取扱われ」る勘定処理は，「記帳の便宜のため」であるとともに，振替的信用創造の基礎に現金的信用創造のあることを，表現する。¹⁾ 事実，預金設定の形での貨幣貸付は，現金支払取引にも無現金支払取引にもつながるのである。

1) 川口慎二『銀行』東洋経済新報社，昭和58年7月刊，94頁，参照。

他方，預金振替は，まず実質預金振替関係において，把えられなければならない。

そして，実質預金の返済関係を別としても，銀行組織外への漏出部分を除いての，多数顧客の実質預金振替は，預託された貨幣の準備金と貸付可能資本との再分離，一部準備を残しての名目預金化を媒介し，貸出による新たな実質預金形成の可能性を媒介する。かくして，再生産の流動性に媒介されての，同じ過程の繰り返えしによる，実質預金に較べようもない，膨大な名目預金形成

であり、「銀行制度を通じて生ずる銀行預金の倍数的拡張」である。

名目預金の形成関係を、銀行準備率と銀行準備金を基礎としての名目預金貸付としてではなく、先行する実質預金の、一部準備金を残しての、名目預金への転化関係として把えることは、現金的または振替的銀行信用創造を、即ち「銀行制度を通じて生ずる銀行預金の倍数的拡張」を理解するための第一歩である。

そして、銀行預金の倍数的拡張の基底にあるものは、諸商品の形態変換または変態、または、これに現象する生産および消費の過程の流動性である。これが現象しての、個別諸資本の、そして銀行業資本の、運動であり、個別諸資本の、そして銀行業資本の、支払能力と流動性とである。再生産の流動性に媒介されての、預金還流であり、再生産の流動性の表現としての、銀行制度を通じて生ずる銀行預金の倍数的拡張である。

さて、銀行業資本バランスシートは、一時点における銀行業資本運動状態を示す。それは、運動状態にある相撲の、停止せるビデオである。各種預金による流入貨幣の、現金での、または預金設定の形での、貸付に発しての、同じ関係の、累積の帰結としての、創造された銀行業信用残高、即ち銀行の貸借対照表に現われた、借方、貸出金、保有有価証券等と、貸方、預金総額の中、銀行準備金を超える名目預金との対照関係である。しかし、かくして、それは、預金された貨幣の、現金での、または預金設定の形での、貸付関係の、直接的表現ではない。

そこにある全ての預金は、預金者にとって、彼の資本または所得の、貨幣形態である。そして、そこにある預金の支配的部分は、銀行業資本または銀行組織の、発端における預金とは異なる。しかし、かくして、貸付けられた資本の、直接的表現形態ではない。預金者にとって、それは、銀行からの借入資本の、または銀行からの借入れによって形成された将来の所得の、貨幣形態ではない。貸付けられた貨幣または貨幣資本は、資本として前貸しされ、または将来の所得の貨幣形態として支出された。それは、生産諸要素に、または生活手段に、転形した。現実の流通過程では、一方の売りは他方の買いである。還流

した資本による、または実現した収入による、銀行組織外への漏出部分を除いての、銀行への還流、即ち、銀行への返済であり、預金である。そして、かくして形成された預金として、預金の支配的部分はある。

預金は銀行準備金との量的対比関係に係わりなく、一つの擬制資本である。しかし、かくして銀行預金の支配的部分は、未支出の銀行借入分を除いて、再生産過程に媒介された、国民的富に裏づけられた、存在といわなければならない。

こうして、預金通貨銀行について云えば、これの貸借対照表、貸方、要求払預金、定期性預金は、預金者にとって、独特の、または現実の、流通過程に機能する、資本または所得の、貨幣形態として存在する。それは、預金者にとって、手許にある銀行券および手形と並んで、彼らの貨幣または貨幣資本の存在形態である。

そして、全預金と銀行券とはそれが銀行準備金を超える限りでは、全預金者と銀行券所持者にとって、手許保有の手形と共に、貨幣種または貨幣形態で追加された、または、貨幣種または貨幣形態に分割された——架空だとはいえ——資本を、または実現された収入繰越残を形成する。そして、創出者にとっての、追加利潤を齎す追加の——架空だとはいえ——資本を形成する。

商品としての資本の理論に発し、支払手段としての貨幣の機能発生関係の問題に発しての、資本主義的商業信用、銀行業信用、預金銀行および中央銀行信用への、上向であった。流通の背後に蔵されての生産と消費との関係であり、再生産の流動性を蔵しての、銀行業信用創造である。それと共に、信用は、消費の限界を無視しての、再生産の極度の緊張を媒介する。資本主義的信用と資本主義的再生産の発展との、また、資本主義的信用と資本主義的再生産に不可避の経済恐慌との、関係が経済学最重要課題となる。

しかし、それはともかく、振替的信用創造は現金的信用創造からの同一性からの差別性において、把えられた。しかして、現金的信用創造という用語は、広義には、預金された貨幣が現金で貸付けられた場合のすべてを含んで用いられるべきであろう。それは定期性預金関係を含むばかりか、さらには、他の金

融機関における関係にも、拡大して用いられて然るべきであろう。しかし、現金的信用創造または現金的銀行信用創造という用語が振替的銀行信用創造に対する関係において、狭義に、現金的出納預金関係でのそれに限定して用いられるのは、蓋し、預託された貨幣の貸付可能資本への転化、実質預金の名目預金化の関係は、現実の支払手段への転化の容易度の優れた現金的出納預金に比し、定期性預金関係においては、そして信託会社等、他の金融機関の間接証券にあっても、問題とするまでもなく顕わであること、その名目預金化は、同じく要求払預金である振替的出納預金との繋りで問題とされるに至ったこと、に拠るのである。

他方、銀行業信用に現われた「資本と信用とを創造する」資本関係に先行して、商業信用でのそれがある。社会の再生産構造と結びつくことなしに、いかなる形態の信用創造もない。そして、再生産にとってより直接的なそれは、商業信用創造である。しかし、狭義に信用創造という用語が銀行関係でのそれに限定されるのは、蓋し、(1)近代の利子および利子つき資本の生産関係を表現するところの、範疇としての資本主義的金融機関の序列において、銀行は他の金融機関に先行するからであり、(2)上述現金的および振替的出納預金関係に加えて、(3)「信用と資本とを創造する」資本の生産関係はまずは銀行関係に集約され、外面化されるが故であろう。しかして、信用創造といわゆるマネーサプライ定義とは相似である。

(昭和60年12月7日)